

「しゃちほこ」と「うを」の関係について ①

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 *Takanori Sato*

『天理教教典』「第三章 元の理」には、月日親神が、「男雛型」と定めた「うを」に、「しゃち」の「骨つっぱりの道具」を仕込んだとある。

本シリーズの前回で紹介したように、「しゃち」と「しゃちほこ」は同義語と考えられる。そこで本稿以降から、「鯪」は「しゃち」や「シャチ」ではなく、「しゃちほこ」と称することにする。それは、前回で述べたように、幕末から明治にかけての庶民にとって、「しゃちほこ」はクジラの仲間のシャチではなく、また魚類のマツカサウオでもなく、むしろ『和漢三才図会』で紹介された「魚虎」、すなわち「鯪」だったと考えるからである。

これは、「うを」すなわち「鯪魚」であるサンショウウオに対して、大和地方ではお寺などの棟飾り瓦として取り付けられている想像上の動物、「鯪」の「骨つっぱり」の道具が仕込まれたことを意味する。

「鯪」の姿形は、尾の先をまっすぐ天に向け、まるで“逆立ち”しているかのようであり、また身体を大地に向けて突っ張っているかのようにも見える。さらに、いかめしく構えたり、緊張してかたくなってしまうような姿形から、「鯪張る」、「しゃちよこぼる」、「しゃちこぼる」などの表現が生まれた。「骨つっぱり」の表現も、似たような意味合いである。

なぜ、「うを」に「骨つっぱりの道具」が仕込まれたのか

平易に言えば、どうして、サンショウウオに鯪の「骨つっぱり」の道具が仕込まれたのか、である。このことについて、生態学的視点から考察したい。

道友社編『先人の遺した教話 (三) 根のある花・山田伊八郎』(1982年)によると、伊八郎は、明治15年1月、教祖からお聞きした「元初まりの話」を、そのまま『天輪王命』と題する和綴の帳面に書き留めていたという。ただ、「元初まりの話」については、同年8月か9月にまとめたとされる『聞問記』にも記述している。この『聞問記』は、『天輪王命』よりもより整理された内容となっており、両書とも、伊八郎が教祖から直に拝聴した「元初まりの話」を、正確に書き記したとされる貴重な資料である。

この『聞問記』の中の「古記」の、“ぎぎよ”に相当する「うを」の部分には、この「うを」は「…かたの処に ゑらがあり」と記されている。同じ山田伊八郎文書の『教祖様御言葉』(明治18年7月19日 神様の仰せ)にも、「魚のかたの処、ゑらが有」と似たような表現がある。いずれの場合も、この「うを」はサンショウウオの幼生だと、すでに本シリーズの中でも紹介した(『グローバル天理』第16巻第8号5頁の図2参照)。

さらに動物生態学的にみると、とくに大和地方の平野部山麓の水田域に広く分布していたであろう「畑ドジョウ」、すなわちカスミサンショウウオは、1年のほとんどを陸上で生活する。オオサンショウウオのように、水中で生活することはほとんどない。水中へ入るのはあくまでも繁殖のためであり、せいぜい雄の場合は2週間前後、雌にいたってはほんの数日間しか水中で滞在することはない。

サンショウウオ(この場合は小型サンショウウオを指す)は、

水中で繁殖をおこない、木の枝葉や岩や石に卵を産み付ける。産み付けられた卵は、ある期間が経過すると孵化して幼生になる。この幼生こそ、「…かたの処に ゑらがあり」という状態の「うを」なのである(図1)。

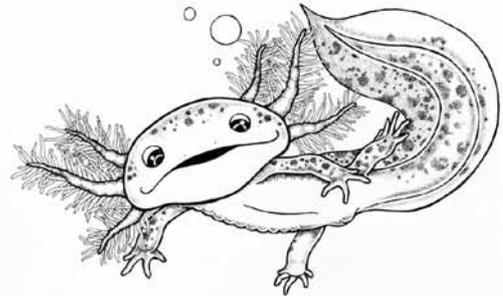


図1 エゾサンショウウオの幼生。イラストは八重樫威臣氏。

進的に見ると、サンショウウオをはじめとする両生類は、水中から酸素を取り込む鰓呼吸の魚類から、鰓への依存をなくし、陸上生活に適応した皮膚呼吸や肺呼吸へと、「酸素吸収システム」を変更改せることに成功した。このシステムは、両生類が魚類より進化したことを示す好例だが、残念ながら、水中で産卵がおこなわれるように、「繁殖システム」は魚類の面影を引き継いだままだった。そのため、卵から孵化した両生類の幼生は、魚類のように「水中生活」をおこなうことになる。

しかし、水中で変態し、幼体となったサンショウウオは、鰓を体内に吸収させて上陸する。そして、成長して亜成体・成体になると、爬虫類のような「陸上生活」を始めることになる。このように、両生類は水中と陸上の両方を生活場所とすることから、“両生”類と名付けられたという。

すなわち、「うを」であるサンショウウオは、「水中の住まい」と「陸上の住まい」の両方が必要なのである。しかも、水中に適応した幼生は、鰓が体内に吸収されるとどうしても陸へ上がらなければならない。それは「酸素吸収システム」が鰓呼吸から肺呼吸へ移行するためである。ちなみに、幼生から変態したばかりの幼体を水中で長居させると、溺れて死ぬことがある。幼体は陸へ上がるために必死なのである。

動物行動学的にみると、サンショウウオの幼生は水中では浮力が働いたため、両足の筋肉にそれほど大きな負荷がかかることはない。むしろ、泳ぐだけであれば、両足は必ずしも必要ではない。ところが、鰓が体内に吸収され始め、上陸が間近になると、両足はそのための準備を始める。たとえば、浮力が働かない陸上生活に適応しようと、両足(前・後肢)は水中で突っ張ったり、鯪張ったりする。まさにこの「道具」は活かされ始め、この「道具」が仕込まれなければ、幼体は溺死するのである。

このように、「うを」は、鯪の「骨つっぱりの道具」が仕込まれなければ、「水中の住まい」から「陸上の住まい」へと生活場所を移行できなかったはずである。また、魚類から両生類は誕生することなく、爬虫類や鳥類・哺乳類への進化もなく、さらに私たち人類も「八千八度の生れ更り」はできなかったのである。

要するに、「骨つっぱりの道具」が仕込まれなければ、「陽気ぐらし」世界の実現は、根本的に不可能なのである。